

(英語イメージョン教育〈保健体育〉)

英語イメージョン教育実践の研究

— T P R を保健体育の授業に取り入れて —

沖縄県立首里高等学校教諭 新 納 亜由美

I テーマ設定の理由

グローバル化が急激に進む中、国際社会で生きていくことの出来る児童生徒を育てていくことが課題となっている。それに伴って、母国語の異なる人々をつなぐ共通語として中心的な役割を果たしている英語の重要性が取り上げられ、日本でもより効果的な語学教育法が模索され始めている。こうした中、本県でも英語イメージョン教育の導入が検討されている。

イメージョン教育とは、授業を第二言語（本研究では英語）で教えることにより、学習者に第二言語を習得させる教育プログラムのことである。

そこで本研究では、私の担当する保健体育の授業を英語イメージョン教育研究にどう活かせるかを、幼児が言語を取得する際に言語と動作を結びつけながら言語習得プロセスに着目した指導法 Total Physical Response Approach（以下「T P R」という）をヒントに、「T P R を保健体育の授業に取り入れて」をテーマに設定した。体育の授業では五感のすべてを駆使して運動に取り組むため、T P R に適するのではないかと考えた。またパス、キャッチ、シュートなど、すでに一部英語が定着している事と、オリンピック競技のように、多くのスポーツのルールは世界共通なので、使用頻度も高くスポーツ交流にも役立ち、言葉の壁を補う役割を果たす面でも期待できる。保健の授業は、学習する内容が私達の健康に関することなので、話題が身近で学習内容がある程度予測出来る範囲である。そのため学習者にとっては導入しやすいと予想される。

本稿では英語イメージョン教育研修で学んだ事を基に、英語イメージョンによる保健体育の教科指導に T P R を取り入れた工夫点を示し、沖縄国際大学・沖縄県立球陽高等学校および沖縄県立総合教育センターで実践した授業を中心に、その考察について報告する。

II 研究内容

1 T P R について

(1) T P R とは

米国 San Jose State University の言語心理学者 James J. Asher(1969)が提唱した T P R は、言語活動と全身動作を連合させ、五感のすべてを駆使して言語を習得させようとするものである。全身反応教授法・命令教授法とも言われている。

Asher は、「言語習得は生理的にプログラミングされているのであるから、母語であれ第二言語であれ、聞く作業は話す作業に先行するという自然の流れと、言葉と体の動きを一致させるという方法を学ぶことが可能である」と主張し T P R を提唱した。言語習得の際に言語とともにその言語の表す動作をつけて学習者に提示することで、学習者が動作をまねて全身を使って反応し学習効果を高める方法である。具体的な指導の手順としては図 1 のように Asher(1996)の Learning Another Language Through Actions に基づき紹介する。

まず、指導者は発話したことの意味が学習者に伝わるように明確な身体の動きをつけて示してみせる。学習者がスムーズな動きができるようになれば指導者は動かずに指示のみで学習者に一連の動作をさせるようにする。そして指示語に適切に反応できるようになれば、新しい語彙を導入し、繰り返し同様に指導していく。新しい語彙の導入は一度に多くの導入をしないように心がけることが大切である。

以上のように、段階的により複雑な構文や語彙を導入しながら学習を進めていく。

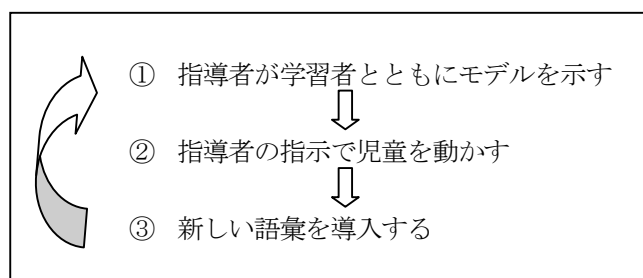


図 1 具体的な指導手順 Asher (1996)を参考に作成
Learning Another Language Through Actions

(2) T P Rの3つのキーワード

① 聴く作業が話す作業よりはるかに先行する

T P Rの指導スタイルは、先生の命令通りに体を動かすことが基本で、話すことは強制されない。話すことに対する緊張を感じないため、いずれ、自発的に話すことができるようになると考えられている。

② 体で反応することで理解を確認する

T P Rでは、聴解力がいずれ他の技能に転移していくと考えられています。教師の命令通りに体を動かせるということは、聴解力が形成されていると考えられます。たとえば“Stand up”と言われたら立ち上がり、“Sit down”と言われたら座り、“Open the door”と言われればドアを開け、“Close the door”と言われたらドアを閉める。こうした言葉と動作をつなげていくうちに自然と外国語が身に付くというわけである。こうした単純明快な命令と動作の中にも、「育てるヒント」がある。

③ 「命令」は人を育てるときに不可欠な要素

教師が外国語で命令し、生徒はその言葉を聞いて身体で表現します。「命令」＝「強制的」というイメージがあるが、そうではなく「相手に道筋を提供してあげる」心配りが大切で、具体的な命令で「具体的な行動」をとらせるように働きかけなければならない。

2 T P Rを効果的に用いた体育の授業

発生言語学というものがある。発生言語学がT P Rの背骨になっている。いったいどういう順番で人は母国語を習得していくのかを考える学問である。赤ん坊は言語を覚えていく過程で両親や祖父母など周囲で交わされる会話を自然に耳にし、いつの間にか言語を理解し話せるようになる。耳にしたことを何となく実践し、周囲の反応を伺いながら言語を習得していくのである。つまり、体を使い自ら体験し、確認しながら言語を取得しているのである。

学習者は指導者から発せられた言葉に対し、言われたとおりに動作をしたり口頭で答えたりと反応する。T P Rで大切な事は日本語訳を子供たちに与えないということである。指導者がどんどん英語のシャワーを学習者に浴びせるのである。それは一言で言ってしまえば、英語専用の神経回路を作ることである。

私たちは日本語を話す際、いちいち文法的にどういう風にしゃべろうと考え日本語訳するわけではない。私たちの中には日本語専用の神経回路があるからそういうことができるのである。英語をすらすら理解し話せるようになるには、英語専用の神経回路が必要なのである。

幼い頃より「聞く→話す→読む→書く→文法」の順序で日本語を学んできた。この順序は世界中どここの言語でも普遍である。つまりこの順序が一番合理的だということである。T P Rは入り口の「聞く→話す」の部分を担当する。T P Rで頻繁に英語を聞かせ、英語を体験させることが大切である。

T P Rを保健体育の授業で導入する場合、指導者は学習者に対して、英語を浴びせながら自ら動作を伴い学習者に手本を示す。そうすることで聞いたことが理解できなくても体を動かせることにより、動作から何を言ったのか学ぶのである。一度でわからなくても何度も繰り返すことで身に付けることが可能である。例えば体育の授業の準備体操は、学年や種目に関わらず、授業の導入で必ず実施する。指導者が言葉を発すると同時に動作で示すと、学習者も同じ動作を繰り返す。これを毎回実施することで学習者は確実に理解し、次の段階では自ら言葉を発する事も期待できる。

またテニス・卓球・野球・ソフトボールなどラケット(バット)競技では、ルールは違っても、ラケット(バット)を握る・振る・ボールを打つなど同じ用語を使用することが多い。バスケットボールやサッカーなどでも、パス・ドリブル・シュートなど、同様の用語が多く、使用頻度も高く反復効果も作用し、動作と結びつけることで早く覚えることができる。つまりスポーツ中に動作と同時に言葉を発することで、日本語に変換する間もなく、英語専用の回路を作るのである。実際にプレー中は動きの中で瞬時に判断し、場面はどんどん変化していくので、会話や文章のように多くの言葉を発する事はなく、プレーに必要な最小限の要求のみ単語で発するため、体育の授業はT P R実践の場であると言える。

表 1 体育の授業で使用頻度の高い言葉と種目例

共通に使用される言葉	動作、プレーを表す言葉	種 目 例
基礎体力、準備体操、ルール、などに必要な語句	・パス・キャッチ・ドリブル	・サッカー・バスケット
・深呼吸・走る・跳ぶ・投げる・伸ばす	・シュート・ゴール など	・ハンドボール
・曲げる・始め・終わり・勝ち・負け	・サーブ・レシーブ・トス	・テニス・バドミントン
・攻める・守る・打つ・握る・振る	・スマッシュ(スパイク) など	・バレーボール・卓球
・得点・同点・体の部位を表す言葉 など	・ヒット・ホームランなど	・野球・ソフトボール

Ⅲ 実際の授業

1 実践例 1

単元名 卓球（シングルス） 対象生徒 高校1年生 30名

(1) 本時の目標

- ・正しいラケット選択（二種類あるラケットから自分に合ったラケットを選択出来る）
- ・サーブ・ストロークなど基本的な技術が身に付いている
- ・ルールを覚え、試合・審判が出来る

(2) 授業仮説

前半は指導者主導で、準備体操・ラケットの種類・ルールの説明をする。後半は学習者同士でシングルの試合・審判を行う。お互いで試合運営をすることで協力し、ルールも必要な英語で言えるようになる。

(3) 本時の展開（略案）

	教師の活動	生徒の活動	生徒の実際（反応）
導 入	①準備体操をする。 ・指導者が説明しながら見本を見せ、生徒に号令をかけさせる。	①準備体操をする。 ・号令をかける。	①教師を見ながら準備体操する。 ・号令をかけることが出来る。
展 開	②ラケットの説明をする。 ・ラケットを二種類紹介する。 ・握って見せ使用法を説明する。 ③ストローク・サーブ説明をする。 ・学習者を集め実演して説明。 ④ルール説明をする。 ・卓球台とボールを用いて説明。	②ラケット選択をする。 ・自分に合った選択ができる。 ・正しい握り方ができる。 ③ストローク・サーブの練習。 ④説明を聞く。	②様子を伺いながら理解している。 ・正しいラケット選択が出来る。 ・正しく握れる。 ③言葉は発しないためリラックスして楽しく練習している。 ④半分は理解しているが、半分はジェスチャーで予測している。
ま と め	⑤ミニゲームをする。 ・対戦表・ルールを一覧に提示しスムーズな運営を促す。	⑤ミニゲームをする。 ・試合・審判などの係分担を仲間と協力することができる。	⑤審判はポイントなど簡単な英語で出来るが、試合中は熱中してしまい日本語で感情を表していた。

(4) 考察

体育の授業は動きが中心なのでTPR導入は容易である。準備体操は説明と同時に指導者が動作も示しているの、学習者は写真1のように条件反射のように同じ動作をした。ラケット選択では実際にラケットを握って見せる。ルールの説明では卓球台の上でボールをバウンドさせながら説明したので、耳で聞いて目で確かめながら理解しているように伺える。

ミニゲームでは、審判は得点やサーブ権の移動など簡単な英語でこなしていた。試合中にスマッシュが決まった時やミスをした時など、とっさに発せられる言葉は日本語であった。



写真1 準備体操の様子

2 実践例 2

単元名 フォークダンス（アメリカ） 対象生徒 高校3年生 40名

(1) 目標

- ・ダンスに必要な用語を覚える（ポジションやステップ名など）
- ・ステップを正確に踏むことが出来る
- ・リズムに合わせて仲間と楽しくフォークダンスを踊ることが出来る

(2) 授業仮説

最初にダンスの用語やステップを英語でインプットする。次にステップを踏みながら振り付けを覚える。必要語句を英語とジェスチャーで示すことにより理解力を高め、フォークダンスが踊れるようになる。

(3) 本時の展開（略案）

	教師の活動	生徒の活動	生徒の実際（反応）
導 入	①ダンスに必要な語句の説明をする。 ・プロムナード ・ゲート ・チェーン ・スキップなど。	①ダンスに必要な語句を覚える。	①語句を理解している。

展 開	②実際にパートナーと立ち位置を確認、ステップを踏んでみる。 ③手拍子でリズムを知らせる。 ④手拍子とステップ名だけを示す。	②パートナー・立ち位置確認する。 ステップを踏んでみる。 ③手拍子でリズムを覚える。 ④手拍子とステップ名で動く。	②プロムナード等初めて取り組むステップに戸惑っている。 ③手拍子でリズムを理解する。 ④ステップ名を理解する。
ま と め	⑤音楽をつける。 ・手拍子リズムとステップ名のみ指示する。	⑤音楽に合わせて踊る。	⑤一度目は音楽を聞いてしまいリズムが合わないが、二度目はリズムよく踊れる。

(4) 考察

事前にダンス用語を説明したので、すぐに理解することができ問題ないと思われたが、実際に動き始めると、手の位置は？回転方向は？スピードは？etc と、多くの質問が飛び交った。英語で質問するように言うと学習者はジェスチャーと片言の単語でアピールした。中には質問（英語）を諦める人もいた。動きを見て理解し学習者同士で教え合う場面もあったが、日本語で話していた。1つ1つの動きを覚え音楽を流すと、指示語（ダンス語句）とリズムを刻む拍手で条件反射のように音楽に合わせて踊ることが出来た。英語理解に関しては確認出来ないが「フォークダンスを踊ることができる」という目標は達成出来た。

卓球が過去に取り組んだ経験がある種目に対して、本時のダンスは初めてであったため、授業理解の早さには違いがあった。このことから過去の経験の有無は語学習得に大きな影響があると思われる。

3 実践例３・・・TPRを活用した保健の実践事例

私の担当するもう一つの教科「保健」でもTPRを活用した授業を実践した。運動領域ではないので、パワーポイントによるスライドで心肺蘇生法の説明をし、後半に実際に実践し、動作と結びつけた展開をした。

単元名 心肺蘇生法 対象生徒 高校1年生 40名

(1) 授業目標

- ・心肺蘇生法が出来る事によって、多くの人命が助かることを知る（必要性）
- ・心肺蘇生法の原理を理解し、正しい心肺蘇生法が行えるようになる（確かな実践能力）

(2) 授業仮説

前半にスライドを用いて心肺蘇生法の必要性や原理・方法を学ぶ。後半は心肺蘇生法練習人形を用いて教師が手順を示し続いて学習者に実演してもらう。実演することで学習効果は高まり英語でも可能である。

(3) 本時の展開（略案）

	教師の活動	生徒の活動	生徒の実際（反応）
導 入	①救急患者や救急車出動の現状を説明する。（患者・救急車の要請増加） ②心肺蘇生法の必要性を説明する。（早急の応急処置が多くの命救う）	①説明を聞き現状を知る。 ②心肺蘇生の必要性を知る。	①・②共通 英語での説明のため戸惑いもあるが、パワーポイントの画像を見ながら理解している様子である。
展 開	③心肺蘇生法の説明をする。（パワーポイント） ④実演(手順)を示す。 ⑤心肺蘇生法の指示・補助をする。	③パワーポイントを見ながら説明を聞き、質問に答える。 ワークシートを記入する。 ④見ながら手順を覚える。 ⑤心肺蘇生法実演を行う。	③画像を見ながら理解している。専門用語が出てくると、調べたり焦る場面があり集中力が途切れた。 ④手順を覚えながら見ている。 ⑤患者への声かけなど言葉を発する場面では消極的であるが、心肺蘇生の動作はスムーズに行える。
ま と め	⑥ポイントの確認をする。 何問か質問をする。	⑥質問に答える。 イエス・ノー・数字で答える。	⑥よく理解しており、答えもイエス・ノー・数字なので、素早く正しく答えることができる。

(4) 考察

説明ではスライドを用いて視覚的に語学の補助を意識した展開を広げた。多少わからなくてもスライドを見ることで理解していた。後半の心肺蘇生法は指導者が先に実演して手順を示し、続いて学習者に実演してもらった。学習者は手順よく実演することができるが、意識の確認など自身が英語を発する場面では、声が小さく消極的で、英語を発することに抵抗があるようだ。



写真2 人形を用いての実演

専門用語では焦って辞書で調べ始め集中力が途切れた場面もあった。保健の授業でも T P R 活用は可能であるが、視覚教材やワークシートなど、補助教材の工夫が必要で効果的である。

4 アンケートからみる生徒の英語・授業理解度

実際に授業を行った球陽高等学校2年生(23名)、沖縄国際大学3・4年生(9名)にアンケートを実施した。アンケートは無記名で授業終了後に実施した。結果は次の通りである。図2・3は保健に関する意見である。

指導者が話す英語のスピード、発音、表現など、英語がわかりやすかったかを質問すると、図2のように「よくわかった」「わかった」という意見が高校生で80%以上、大学生では100%であり、スライドを用いた説明と、指示語のように短い単語で簡単に表現する英語は十分理解することができる。

授業の理解度に関しては、大学生の8割以上が100%理解しているのに対して、高校生は1割程度であった。しかし、60%以上理解した人を合わせるとほぼ全員であり。多少わからない語句があっても、指示する人の動作に合わせて一緒に動いてみたり、仲間と一緒に取り組む事で理解度を増しているようだ。また、動作や手順で英語を予想している様子(理解)も見受けられた。

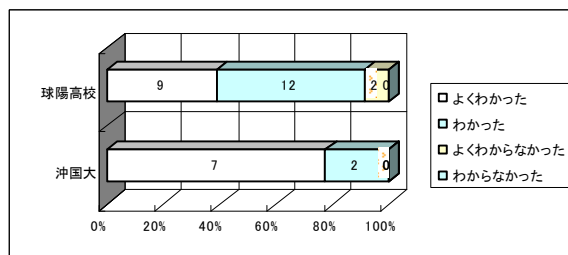


図2 教師の話す英語はわかりました

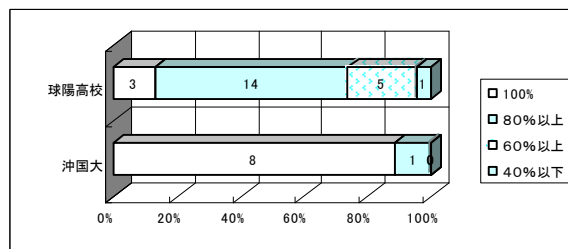


図3 どの程度授業を理解できましたか

表2 授業後の生徒の感想(抜粋・複数回答可)

	球陽高校の生徒	冲国大の生徒
体育	〈肯定意見〉 ・見ていたら何となくわかる。 ・英語を使う機会が少ない。 ・友達と一緒にだから楽しい。(仲間・連帯感) ・海外でも同じスポーツはあるから。 〈否定意見〉 ・運動中は言葉を発する事が少ない。 ・動きながら瞬時に英訳出来ない。 (スポーツに集中できない・楽しめない) ・危険、ケガの心配がある。	〈肯定意見〉 ・健康に良く体力向上につながる・リフレッシュ効果。 ・英語が苦手でも取り組める。 ・動作など日頃から使用している英語がある。 ・友達と一緒にだから楽しい。(仲間・連帯感) 〈否定意見〉 ・英語を発する機会が少ない。 ・ジャンプなどすでに英語が当たり前に使われており、特に英語を学ぶ必要ない。 ・瞬時に英語に訳するのは難しい。 (スポーツに集中できない・楽しめない) ・ケガにつながる教科なので危険である。
保健	〈肯定意見〉 ・自分の健康に関することなので必要。 ・内容が常識である。 〈否定意見〉 ・専門用語が多い。 ・正しい知識の取得が必要。(母語が望ましい)	〈肯定意見〉 ・健康に関することなので必要。 ・日本語では恥ずかしい言葉も英語では表現出来る。 〈否定意見〉 ・確実に身につける必要があるの、母語が望ましい。 ・専門用語がたくさんあり理解が難しい。

「英語を発する機会が少ない」という理由が肯定理由にも否定理由にもなっているのに驚いた。個人の英語能力の違いが、肯定理由にもなり否定理由にもつながっていることがわかった。言葉を発する、すなわち英語を話すということは、学習者が授業に参加する際、負担に感じていることが汲み取れる。

「また英語で体育の授業を受けたいですか」との質問に対しては、高校生、大学生とも「はい」の意見の方が半数を超えた(図4)。

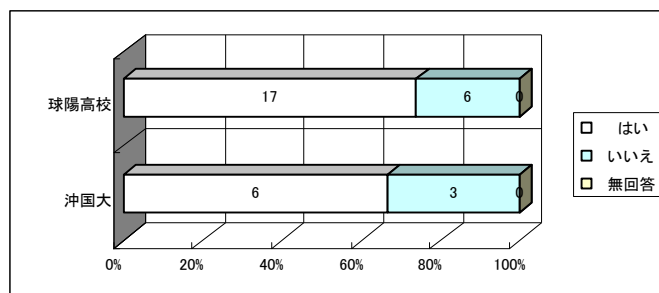


図4 また英語で体育の授業を受けたいですか？

T P Rが動作を伴うこと、インプット重視でアウトプットを強制しないこと、指示語など文法にこだわらず単純な英語でも取り組めることから、個人の英語能力に左右されず、不安材料を緩和できる面からも肯定意見が多いと思われる。また、体育の特性である「仲間と一緒にスポーツを楽しめる」ことが、リラックスして英語学習に取り組め、リフレッシュ効果も期待できることが功を奏しているのではないだろうか。

5 実践授業とアンケート結果からの考察

アンケートの結果、体育の授業はT P R実践の場で、学習者は楽しんで取り組んでおり、健康面や仲間との連帯感など、興味関心の面でも英語イマージョン教育導入に適していると思われる。

学習者の授業後の感想から、肯定・否定理由ともに「言葉を発する機会が少ない」と同じ意見があることから、指導者側の工夫によって否定理由を回避出来ると思われる。例えば、準備体操を学習者自身の号令で行う、試合の審判も学習者に英語で実践させるなど、役割分担を行うことで英語を発する機会を提供するなど、指導上工夫する必要がある。

また、生徒の語学力に応じて段階的に種目の選択を行えば、より効果的な英語イマージョン教育が可能だと思われる。表4のようにイマージョン導入時期に応じて種目の選定をすればより効果的ではないだろうか。実際に授業に導入する際は、学習指導要領とカリキュラムに則った教育内容を検討しなければならない。

表3 種目の選定例

導入時期	種 目	理 由
イマージョン 初 期	ストレッチ・ダンス(舞踊含む) 空手の型・陸上(走る) など	道具を使わず行動範囲も少ない個人で取り組める種目
イマージョン 中 期	卓球・バドミントン・陸上(跳躍) ソフトボール・野球・テニス など	道具を用いるが相手と接触の少ない種目
イマージョン 後 期	バスケットボール・サッカー ハンドボールなど	道具の使用、スピードもあり他人との接触も激しい種目

IV まとめと今後の課題

これまで、英語イマージョンプログラムの導入に向けた体育の指導方法の工夫について考えてきた。その中で以下のような成果と課題が得られた。

1 成果

体育の教科で英語イマージョン教育を実践する場合、体育は運動が中心なので、T P Rの活用は有効であり、まさにT P R実践の場である。体育は仲間と一緒にスポーツを通して楽しむことから、学習者にとってリラックスして取り組める面でも良い効果をもたらしている。

パス・キャッチ・シュートなど日頃から定着している語句が使用されることと、スポーツの種類は違っても、サーブ・レシーブなど同じ用語を使う場面も多く、反復効果もあり英語習得に一役かっている。

T P Rは話すことを強制しないのでインプット重視である。実践授業でも、インプット重視の少ない語彙力・指示語で学習者は体育の授業を楽しむことが出来、技術の向上につながりルールを理解することができた。

2 課題

T P Rはインプットを重視することから、アウトプットは後回しになる傾向がある。プレーに熱中してしまうと発する言葉は少なくなってしまう。指導者は学習者の英語能力や授業中の反応を伺いながら、意識して学習者にアウトプットの場面を設定する必要がある。

体育は集団で授業を実施し行動も範囲も広く道具を使用することから、安全確保が重要課題の1つであり、常にケガや危険と隣り合わせである。また体育の特性として、動きの中で瞬時に判断し指示を出さなければならない。タイミングを逃してしまうと、ケガにつながったり、次の動作に移ったりして、効果的な指導につながらない。技術の取得・向上のチャンスを逃してしまうことになり得る。

山本雅代の「バイリンガルの世界」では教師の条件として、学習者には正確な手本と豊かな言語環境が与えられることが大切であると言っている。指導者には高い語学力・イマージョンプログラム及び教科に対する専門的な知識と経験が必要である。

〈主な参考文献〉

安達洋 2006 「コトバ」と「カラダ」の関係 Waseda Garden

樋口忠彦・金森強・國方太司 2005 『これからの小学校英語教育 ―理論と実践― 』 研究社

山本雅代編 1999 『バイリンガルの世界』 大修館書店